

# 或る秋の紫式部

岡本かの子



時

寛弘年間の或る秋

処

京の片ほとり

人

紫式部 三十一二歳

老侍女

妙な美男

西向く聖

（舞台正面、質素な西の対屋の真向き、秋草の生い茂れる庭に臨んでいる。その庭を囲んで矩形に築地垣ついでがきが廻らされているが、今は崩れてほんの土台の型だけ遺つてのこいるばか

りなので観覧席より正面家屋の屋内の動静を見物するのに少しも差支えない。

上手、築地垣より通路一重を距てて半、紅葉した楓かえでの木の下に、漸ようやく一人一人の膝を入れるだけの庵室。傍に古井。

正面、対屋の建築は、紫式部の父、藤原為時の邸宅の一部であつて、為時は今、地方官として赴任中、留守であるが、式部はしばらく中宮より宿下りして実家の此の部屋に逗留しているところ。几帳、棚、厨子ずしなど程よく配置されてある中で式部は机に向つて書きものをしてゐる。老侍女は縁で髪を梳すきかけてゐる。隣の庵室には上手を向いて老いさらばつた老僧が眼を瞑つむつて端座してゐる。虫の声。

老侍女（髪を梳き終つて道具を片付けながら）「ああ、やつとこ

れで気持ちよくなりました。なにしろ年をとりますと禿げますせいか、頭が始終、痒かゆうございまして、時ならないときに梳き度くなるのでございます。ほんとに我儘をさせて頂いて申訳ございません。(手をついて礼をして) お蔭さまで気がせいせい致しましてございます」

式部(筆を持ったまま)「なにも、そう一々、鹿爪しかづめらしく御叩頭おじぎには及ばないよ。御殿で勤め中与違つて、私宅で休暇中なのだから、まだ外に、したい事は何なりと思いつくままにするがよろしいよ」

老侍女「有難うございます、いえもう、自由にはと、つくにさせて頂いておりました、この上、そうそうは余り勿体のうございます」

(妙な美男、上手より登場、急いで、在るか無きかの築地

垣の陰に屈み込む)

式部「あれ、誰か、そこに人が来たようだね」

老侍女「そうでございますか、わたくしは一向気が付きませんでございましたが、どれどれ」(縁へ伸び上りあたりを見廻す。妙な美男、ちよつと屈み上り、老侍女に手招きをする)

老侍女「なるほど、どなたか、いらつしやるようでございませぬえ。あの、どなたでございます」

式部(つと立上り)「こんな様子を人に見られるのは嫌じゃ。わたしは隠れてしまうから、お前、よく用心しといてくれ」(式部、几帳の陰に隠れる)

老侍女「はいはい承知いたしました。それがおよろしゅうございませう。しかし、おかしな人もあればあるもの、黙って外から人を手招きして。まさか昼日中、盗賊じゃあるまい。

(履物を穿いて近づく)。もし、そこのお方、どなたでございます。どなたでございます」

(妙な美男、しきりに手招く。老侍女がそばに来たときに  
男、ぬつくと立上る)

妙な美男「今日は」

老侍女「ひえっ！　びつくりしますわ。この人は急に人の眼の前に立ちふさがって」

妙な美男「いや、驚かせて済みません。驚かすつもりは、ちつとも無かつたんですが」

老侍女「何か御用なんですか。御用なら早くおっしゃって下さいませんか」

妙な美男「では、お尋ねしますが、いま、あすこに筆を持って書いていられた女性は、紫式部さんでしょう。そうでしょう」

老侍女「そうでございます。世間で専ら評判ほめつせの高い奥様でいらつしやいます」

妙な美男「そして、いま書いていらつしやるのは源氏物語の続きでしよう」

老侍女「どうぞでございますか、私どもなんかには判りませんです」

妙な美男「いや、それに違いありませんよ。(眼を瞑つて想像するように)、奥様は今、きつとあの物語の中の死んだ夕顔の事を忘れ兼ねている源氏の君の心を思いやつて、そうだ、そこから次の恋人の発見への物語に筆を進められていられるところに違いない。そうですよ、きつと、そうですよ」

老侍女「何とでも御想像になるのは御勝手ですが、一体、あなた様は何の御用でいらつしたのでございます」



妙な美男「御用と開き直られると困るんですが、若し伺えたら伺つてみたいです。紫式部という方はどんな方ですか。世間の噂の通り、貞淑堅固の御婦人ですか、それとも内心には、ちつとは人の情熱に動かされ易い熱情的なところを持つていられますか。そのところを伺えると大変都合がいいんですけれど」

老侍女「どうぞごさいますかわたくしには、……ただ、下々には思い遣りの深い良い奥様でございます」

妙な美男「それだけじゃ、何の足しにもなりませんね。もつと男女の愛情に対する性格を伺わなくつては」

老侍女「それほど御執心なら、あなたこそ直接に奥様にお会いを願つて、ご自分でお見分けになつたらいいじゃございませんか」

妙な美男（溜息をして）「とてもとても、そんな勇気が出ないのです。私には式部の作品を通して式部は相当、熱情的の方とは思われますが、しかし一方、ひどく鋭いところもあらるるようなので、実際臆病になっちまうのです。それでこんなにあの方をお慕い申していながら仲々お会いする勇気が出ませんのです。まあ今日は此この儘まま、帰りますから、あとでこの色紙を奥様に差し上げて下さい。さようなら」

（妙な美男、家を振り返り残り惜し気にとぼとぼと下手へ入る。老侍女、手に色紙を持ったまま、暫らく呆あきれたように見送っていたが、やがて気がつき、部屋へ戻る）

老侍女「奥様、奥様」

式部「なんですか」（式部、几帳から出て来る。黙って色紙を受取ろうと老侍女へ向って手を出す）

老侍女「奥様、ほんとに妙な人じゃございませんか。相当、いい男の癖に、何だか判らない事ばかり言つて」（色紙を渡す）  
式部「ああ、もう、話さなくつても、みんな陰で聴いていたよ。ありや、なんでもないんだよ。恋をするにも真正面に相手にぶつかつて真心を打ち付ける気魄も無くなり、ただふわふわ恋の香りだけに慕い寄る蝶々のような当世男の一人さ。あつちの花で断られれば、こつちの花に舞い下つてみる。しかし、恋歌は流石さすがに手に入つたものだね」（口の中で読んで、色紙を破つて捨てる）

老侍女「蝶々としたらほんとにいやらしい、暇つぶしの蝶々でございますねえ」

式部「けども、また、いじらしいところもある蝶々さ、そうお憎みでないよ」

(式部再び机に向つて筆を執る。老侍女は所在なさそうにまじまじ式部の様子を見入っている)

(夕暮に向う鐘、虫の音高くなる)

老侍女「ねえ、奥様」

式部「なんです」

老侍女「今朝ほどから随分とお根詰めじゃございませんか。それじゃあんまり、お身体にお毒でございますよ」

式部「これだけは放つて置いておくれ、物を書くのは、言つて見れば、まあ、わたしの虫のせいなのだからね」

老侍女「そうでございますか。何だか知りませんが、わたくしは、こちらへ参りましたから根のいい方をお二人お見受け申しました。一人は隣の庵室の聖さまひじり、一人はうちの奥さま。

恐らく世間にこれほど根のいい取組はございません。お一

人は坐つて西の方を睨みづめ、お一人は筆を握つて書きづめ。やつぱり、お隣のも、虫のせい、でございますか」

式部「ほ、ほ、ほ、お隣のは虫は虫でも、だいぶ、真剣な虫のせい、のようだね」

老侍女「一たい、お隣の聖さまは、ああ昼も夜も坐つたきり西の方を睨んで何をしていらつしやるんでしよう」

式部「そりや、行をしていらつしやるのさ」

老侍女「行と申しますと」

式部「極楽へ行くお修行さ」

老侍女「へえ、ああやつてると極楽へ行けますのでございますか」

式部「あのお方は行けるとお信じになつてゐるのだよ。極楽は西の方に在るといふから、その方へ身も心も向け切りにして

いたら、いつか必ず極楽へ行けるとお信じになつてるのだよ」  
老侍女「本当でございませうかしら」

式部「本当かも知れないし、本当でないかも知れない」

老侍女「嫌でございますわ、奥さま。それが若し本当でないと

したら、あの聖さまは一生無駄骨じゃございませんか」

式部「無駄骨であるか無いか、それは誰にも判らない」(式部は

いつか筆を置いて、屈托氣に頬を襟えりに埋めている)

老侍女(不勝手ながら胸の中で頻しきりに考え廻らしている様子あつ

ての後)「ひよつとしたら骨折り甲斐が無いのかも知れません

でございますよ。何でもあの聖さまは毎日、陽が西の空に廻

る時分から讒語うわごとを言うのでございませぬ、半病人のようになつ

て、わたくしは気味も悪いし、奥さまのお妨げになつてもい

けないと思つたので、申上げずにいました、頻りに焦慮あせる

様子を見ると、どうも覚束ない様子でございますねえ」

式部「わたしも、薄々は気付いているが、声はよく聞き取れない」

老侍女（縁先へ首を出してみて）「あら、もう、陽が西に廻りましてございます。それぞれ、聖さまがむずむず身体を動かし始めなされました。そら、始まりますですよ。奥様、お早くいらつしやい」

式部「どれ」

（二人は縁先へ身体を乗出して聴く）

聖「筏いかだを漕ぐ、浪の音が聞える……あれは聖衆の乗らるる迎えの舟だ。五濁深重ごじよくしんじゅうの此岸を捨てて常楽我浄の彼岸へ渡りの舟。權かを操る十六大士のお姿も、追々はつきり見えて来た。あな尊とうとや観世音菩薩くわんぜいんぼつさつ、忝かたじけなや勢至菩薩せじぼつさつ。筏の舳へびに立って、早

や招いていらるるぞ。やつしつし、やつしつし、それ筏は着  
 くぞ。あの妙たえなる響は極楽鳥の鳴き声じゃな。得ならぬ香り  
 はおん浄土の蓮の花を吹き開く風の訪れだ。それもう聖衆方、  
 ひと漕ぎでござりまするぞ……こちらへ着きまするか、はい  
 はい。支度したくは出来とります……はいはい、……これはいかな  
 こと、もう一櫂、掻き下されと申すに。したら着きまする。  
 のうのう、それじゃ、こちらへ寄りはしまいで、沖へ遠のき  
 ますと申すに。はてさて、意地の悪い菩薩方じゃ。だんだん  
 筏は離れてしまいまする。ええ、それでは人焦らしに漕いで  
 来られたようなものじゃ……おーいおーい、その舟、その筏、  
 影はだんだん薄れて行く。もうすっかり見えなくなつた。拙つた  
 ない宿世すくせか、前世の悪業か、あーあ今日もまた、極楽への行  
 き損じか。誰を恨まんようもない。身も根も疲れ果てた。悲



しもうにも涙も尽き果てた」

(聖、がつくりする。式部と老侍女は顔を見合す)

老侍女「どうやら、聖さまは極楽行きのお船に乗り損なつたよ  
うじゃございませんか」

式部「そうだよ。こういう時代の人間は、あれほどの骨折をし  
ながら、人間の中に何か此の世に引き付けられるものが漉すき  
込まれていて、解脱げだつが手の届くところまで来ていても、どう  
しても掴めずに引戻されるらしい」

老侍女「何が、そんなに邪魔をするのでございましょう」

式部(縁にしゃがんで、たわわに咲き傾いている女郎花を一つ  
おみなえし)

手折つて老侍女に示しながら)「おまえには言つても判るまい  
がそれは美しいものに牽ひかれるという心だよ。この心が此の  
世に魅力を持たせて、捨てようにも捨てさせ切らせないのだ

よ。わたしのようと、つく、に、尼になつてもいい未亡人でもさ」  
老侍女「あら、奥さま、驚きました。それじゃ、何でございませ  
すか、お堅いお堅いとお見上げ申した、あなた様にも、その  
奥には、そんな浮々したお心がおりなのでございませうか」  
式部（女郎花を机の先のあか桶に挿し、それから再び机の前に  
坐つて）「何でそんなに驚くの。今の世の中の人みんな蝶々、  
さつきの妙な若い男も、お隣の聖も、未亡人のわたしも誰で  
も色香にひかれる気持ちは一つなのだよ」

老侍女「そう致しますと、わたくしは、これから奥様のお取締  
りに油断は出来ませんでございますねえ」

式部「ほ、ほ、ほ、ほ、それは大丈夫。わたしのあ、こ、が、れ、は、皆、  
この鎧よろいを通して矢を射交わすのだからね。（筆と紙を指先でつま  
んでみせて）滅多に傷は受けないんだよ」

老侍女「つまり、お気持は全部、筆にこめて紙の上だけに射るのだからとおっしゃるのでございますか」

式部「ほ、ほ、ほ、ほ、そこがつまり虫のせい、だろうか」

老侍女「でも、おかしゆうございますねえ、そんなに此の世の美しさに牽き付けられなさるあなた様が、始終、阿弥陀さまを拜んでいらつしやいますとは」

式部（合掌して独言のように）「迎えの雲、この世の岸、たゆたう渚なみに、あわれにも懐なつかしきわたしの浄土があるのだ。人の世の果敢無はかなさ、久遠くおんの涅槃ねはん、その架け橋に、わたしは奇しくも憩いこい度い……さあ、もう何も言わないでね。だいぶ暗くなつたから、燈でもつけて、それからお齋ときでもお隣の聖におあげなさい」

老侍女「はい」（老侍女は何の事とも判らず阿弥陀仏に一礼し

燈台あかりを式部の机に備え、それから斎を用意し隣へ持つて行く。  
日はとつぷり暮れ、鉦磬しょうけいと虫の声、式部は静かに筆を走らす。

——幕——

或る秋の紫式部

底本：「岡本かの子全集 2」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成 6）年 2 月 24 日第 1 刷発行

底本の親本：「巴里祭」青木書房

1938（昭和 13）年 11 月 25 日発行

初出：「むらさき」

1935（昭和 10）年 11 月号

入力：門田裕志

校正：オサムラヒロ

2008 年 10 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。